

『蜻蛉日記』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法 —『とはずがたり』との比較—

いりえ
入江 さやか

同志社大学文学部嘱託講師

キーワード

聞こゆ, 申す, 意味・用法, 偏り

要旨

本稿では、平安時代成立の『蜻蛉日記』における本動詞「聞こゆ」「申す」の意味・用法について、分類、記述をし、その意味・用法ごとの事例数を挙げることを目的とする。『蜻蛉日記』において、「聞こゆ」は110例見られ、最も多い意味・用法は、「言ふ」の謙讓語、「申し上げる」の76例である。「申す」は、11例のみの使用で、「聞こゆ」と比較すると、10対1の比で少ない。

鎌倉時代成立の『とはずがたり』においては、「聞こゆ」は55例、「申す」は354例見られる。発言行為である「申し上げる」という意味・用法は、「申す」において、240例見られるのに対して、「聞こゆ」においては、「申し上げる」の意味・用法はほとんど見られない。

1. はじめに

本稿では、平安時代成立の『蜻蛉日記』における本動詞「聞こゆ」「申す」について、意味・用法を分類、記述し、その意味・用法ごとに事例数を挙げる。これによって、多義語における、意味・用法の出現の偏りを知ることができる。さらに、入江(2014)『『とはずがたり』における「申す」の意味・用法』、入江(2015)『『とはずがたり』における「聞こゆ」の意味・用法』と比較し、意味・用法の出現の偏りの変化についても、数値で示す。

2. 研究方法

『蜻蛉日記』に用いられている「聞こゆ」「申す」の事例をすべて抜き出し、意味・用法の記述、分類を行う。本文は、木村正中・伊牟田経久校注・訳(1995)『新編日本古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』による。事例を記す際は、木村・伊牟田(1995)の本文で「聞こゆ」「申す」が用いられている箇所を抜き出し、(巻, 頁数, 行)の順で記す。Iは上巻, IIは中巻, IIIは下巻, IVは巻末歌集を示す。(I 130.03)は上巻, 130頁, 3行目ということである。本稿では、『蜻蛉日記』における本動詞「聞こゆ」110例、「申す」11例を中心に述べる。「聞こえさす」は、「聞こゆ」に助動詞「さす」が下接したものとする。「聞こゆ」「申す」を前項, あるいは後項に持つ複合動詞については、事例数のみ挙げる。「聞こゆ」「申す」の連用形が名詞化した「聞こえ」「申し」は、『蜻蛉日記』において、「聞こえ」の事例は見られず、「御前申し」が1例、『とはずがたり』において、「聞こえ」が5例、「申し」の事例

は見られなかった。

3. 『蜻蛉日記』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法—『とはずがたり』との比較

3.1 『蜻蛉日記』における「聞こゆ」の意味・用法

『蜻蛉日記』における「聞こゆ」の意味・用法を、次の5つに分類する。事例数も示す。

- | | | |
|---------------------------|------|------|
| ① 音や声が自然に耳に入る。聞こえる。 | ———— | 8 例 |
| ② 思われる。聞いて、わけがわかる。 | ———— | 10 例 |
| ③ 間接的に他人から聞く。伝聞する。うわさで聞く。 | ———— | 3 例 |
| ④ 発言行為「言う」の謙譲語 | ———— | 76 例 |
| …④申し上げる。返事をする。手紙を書く。 | | 68 例 |
| …④歌を詠む。 | | 7 例 |
| …④人や立場・呼び名について、～と申し上げる。 | | 1 例 |
| ⑤ その他行為「する」「願う」「会う」の謙譲語 | ———— | 13 例 |
| … i 「する」の謙譲語 | | 7 例 |
| … ii 「願う」の謙譲語 | | 3 例 |
| … iii 「会う」の謙譲語 | | 3 例 |

3.1.1 ①音や声が自然に耳に入る。聞こえる。

「聞こゆ」の原義である「音や声が自然に耳に入る。聞こえる」の意味・用法が、全事例110例のうち、8例で全体の7.3%である。(1)は兼家の詠んだ和歌の例で、それ以外は地の文で用いられている。以下は、その事例である。

- (1) 兼家 鹿の音も 聞こえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな (I 093.03)
- (2) ひぐらしの初声 聞こえたり。(I 128.11)
- (3) 夜よきほどにて、みな帰る音も 聞こゆ。(II 217.09)
- (4) いみじき雨のさかりなれば、音もえ 聞こえぬなりけり。(II 267.02)
- (5) いまぞ「御車とくさし入れよ」などののしるも 聞こゆる。(II 267.03)
- (6) 「あな寒」と言ふ声、ここかしこに 聞こゆ。(III 275.05)
- (7) 「あなかまや」など言ふ声 聞こゆる。(III 321.09)
- (8) 言ひののしる声なれど、空をうちかけりて二声三声 聞こえたるは、身にしみてをかしょうおぼえたれば、(III 344.10)

『蜻蛉日記』の作者である藤原道綱母は、『とはずがたり』の作者である後深草院二条のように、全国を旅することもなく、家にとどまっているため、「自然に耳に入る」音が限られている。(3)から(8)までは、すべて、人の声や、人の立てる音で、それ以外に聞こえるのは、(2)のひぐらしの初声ぐらいである。

3.1.2 ②思われる。聞いて、わけがわかる。

この意味・用法は全 110 例中、10 例で、全体の 9.1%である。何かを聞いて、そう思われる、それとわかる、聞いてわけがわかる、理解したという意味・用法である。(18)は現代語にすると、「聞き取る」であるが、ここに分類した。(9)は会話文、(11)は和歌で、それ以外は地の文に用いられている。以下は、その事例である。

- (9) 「宵惑ひしたまふやうに聞こゆるを、ろなうむつかられたまふは。はや」とのたまへば、「乳母なくとも」とて、しぶしぶなるに、(I 157. 01)
- (10) 「ささなみや志賀の唐崎」など、例のかみごゑふり出だしたるも、いとをかしう聞こえたり。(II 196. 04)
- (11) 道綱母 なきかへる声ぞきほひて聞こゆなる待ちやしつらむ関のひぐらし
(II 196. 10)
- (12) 「いづくのぞや」と問ひたれば、「石山へ、人の御迎へに」とぞ答ふなる。この声もいとあはれに聞こゆるは、言ひおきしを、おそく出でくれば、(II 210. 05)
- (13) さて、あかつきがたに、松吹く風の音、いと荒く聞こゆ。(III 273. 06)
- (14) かかる音のせぬは、ものたすけにこそありけれとまでぞ聞こゆる。(III 273. 08)
- (15) 下簾ひきつくるひて、中門より引き出でて、さきよいほどに追はせてあるも、ねたげにぞ聞こゆる。(III 274. 10)
- (16) 鶏の声など、さまざまなごう聞こえたり。(III 289. 06)
- (17) 八日、雨降る。夜は石の上の苔苦しげに聞こえたり。(III 290. 12)
- (18) をりをりにそのこととも聞こえぬほどにしひてうち誦ずることぞある。(III 348. 03)

3.1.3 ③間接的に他人から聞く。伝聞する。うわさで聞く。

この意味・用法は、世間で人々が言っていることを伝聞した、あるいは、間接的に他人から聞いたこととして、ある事柄を取り上げることを示す。全 110 例のうち、3 例で、全体の 2.7%である。(21)は手紙文で、その他は地の文である。

- (19) 悲しびはおほかたのことにて、御よろこびといふことのみ聞こゆ。(I 152. 09)
- (20) それより、例の障りしげく聞こえつつ、日経ぬ。(III 297. 08)
- (21) 「いで、あなあさまし。心にもあらぬことを聞こえさせ、八月にもすまじ。(III 351. 08)

3.1.4 ④「言う」の謙譲語

ここでは、「聞こえる」「思われる」「聞く」という意味ではなく、「言ふ」の謙譲語である「申し上げる」という発言行為について述べる。「聞こゆ」において、この意味・用法が最も多く、76 例見られ、全 110 例のうち、69.1%、約 7 割を占める。下位項目として、④申

し上げる。返事をする。手紙を書く、㊸歌を詠む、㊹人や立場・呼び名について、～と申し上げる、に分ける。

3.1.4.1 ㊺「申し上げる。返事をする。手紙を書く」

まず、㊺「申し上げる。返事をする。手紙を書く」の意味・用法である例を挙げる。全110例のうち、68例見られ、全体の61.8%を占める。会話文での使用が27例、手紙文34例、和歌が1例、地の文6例である。以下、㊺の事例である。会話文、手紙文、和歌、地の文の順に挙げる。

〈会話文〉

- (22) 例の人、「かしこし。をさをさしきやうにも 聞こえ むこそよからめ」とて、さるべき人して、あるべきに書かせてやりつ。(I 091.15)
- (23) (24) 「われ、はかなくて死ぬるなめり。かしこに 聞こえ むやうは、『おのがうへをば、いかにもいかにもな知りたまひそ。この御後のことを、人々のものせられむ上にも、とぶらひものしたまへ』と 聞こえ よ」とて、「いかにせむ」とばかり言ひて(I 130.07) (I 130.09)
- (25) はらからとおぼしき人、まだ臥しながら、「もの 聞こゆ。天地を袋に縫ひて」と誦ずるに、(II 169.12)
- (26) 「おはしまして、問はせたまひつれば、ありのままになむ 聞こえ させつる。(II 198.04)
- (27) 「おもとたちもみな勘当にあたりたまふなり。よく 聞こえ て、はや出だしたてまつりたまへ」など、言ひ散らして帰る。(II 239.12)
- (28) 入りて、「さなむ」とものするに、「思しよらむところに 聞こえ よかし」など言へば、(III 330.13)
- (29) (30) その暮に、またものして、「一夜のいとかしこきまで 聞こえ させはべりしを思ひたまふれば、さらにいとかしこし。『いまはただ、殿より仰せあらむほどを、さぶらはむ』など、聞こえ させになむ、今宵は生ひなほりして、まゐりはべりつる。『な死にそ』と仰せはべりしは、千歳の命たふまじきこちなむしはべる。(III 338.11) (III 338.14)

〈手紙文〉

- (31) (32) 返りごとは、かしこなるおとなしき人して書かせてあり。『みづから 聞こえ めがわりなきこと』とのみなむ 聞こえ たまふ」などぞある。(I 141.12) (I 141.13)
- (33) 書きけることは、「命長かるべしとのみのたまへど、見はてたてまつりてむとのみ思ひつつありつるを、かぎりにもやなりぬらむ、あやしく心細きこちのすればなむ。つねに 聞こゆる やうに、世に久しきことのいと思はずなれば、(II 176.06)
- (34) (35) 「すなはち 聞こえ さすべく思うたまへしを、いかなるにかあらむ、まうでがたくのみ思ひてはべめるたよりになむ。まかでむことは、いつも思うたまへわかれば、聞こえ させむかたなく」など書いて、(II 241.11) (II 241.13)
- (36) さらにさらに 聞こえ させじ。いまは高き峰になむのぼりはべるべき」など、ふさ

に 書きたり。(Ⅲ338.04)

(37) まだしきに、助のもとに、「みだり風おこりてなむ、聞こえしやうにはえまみらぬ。ここに午時ばかりにおはしませ」とあり。(Ⅲ348.10)

〈和歌〉

(38) 道綱 濡れつつも恋しき道は避かなくにまだ 聞こえずと思はざらなむ(Ⅳ374.04)

〈地の文〉

(39) 「ほど経にければ便なし」とて、ただ「このごろは仰せ言もなきこと」と 聞こえられたれば、かくのたまへる、(Ⅰ125.02)

(40) ただ例の御文にて、端に、「この十重なりたるは、かうてもはべりぬべかりけり」とのみ 聞こえたる御返り、

愼子 数知らず思ふ心にくらぶれば十重ぬるものとは見る(Ⅰ151.12)

(41) やうやう日ごろになりて、貞観殿の御方に、いかになど 聞こえけるついでに、道綱母 世の中をはかなきものとみささぎのうもる山になげくらむやぞ(Ⅰ152.14)

(42) (43) 知りと知りたる人、法師にいたるまで、若君の御よろこび 聞こえに 聞こえにと、おこせ言ふを聞くにも、あやしきまでうれし。(Ⅱ190.14) (Ⅱ190.14)

(44) 殿、離れたまひてのち、「かよふ人あべし」など 聞こえたまひければ、(Ⅳ376.11)

3.1.4.2 ㊤「歌を詠む」

「歌を詠む」の意味・用法は7例見られ、全110例の6.4%である。地の文に6例、手紙文に1例見られる。(49)は、本歌を引いたものであるため、「歌を詠む」に分類しているが、実際は、本歌を引くことによって、来てくれない兼家への恨みを間接的に表現している。

〈地の文〉

(45) 忌あれば、とめつ」とのたまへる御返り、

兼家 世をふとも契りおきてし仲よりはいとどゆゆしきことも見ゆらむと 聞こえらる。(Ⅰ123.01)

(46) ある色紙の端を脛におしつけて、それに書きつけて、あの御方に奉る。

道綱母 かたこひや苦しがるむ山賤のあふごなしとは見えぬものからと 聞こえたれば、海松の引干の短くおしきりたるを結び集めて、(Ⅰ155.08)

(47) 御文奉るついでに、

道綱母 ささがにのいまはとかぎるすぢにてもかくてはしばし絶えじとぞ思ふと 聞こえたり。返りごと、なにくれといとあはれに多くのたまひて、(Ⅱ200.03)

(48) 雨いたう降りければ、えおはせぬほどに、隨身して、「しづくをおほみ」と 聞こえたまへりける返りごとに、

道綱 濡れつつも恋しき道は避かなくにまだ聞こえずと思はざらなむ(Ⅳ374.03)

〈手紙文〉

(49) 月ごろ見えねば、なかなかいと心やすくなむなりにたる。『風だに寒く』と 聞こえ

さすれば、ゆゆしや」と書きけり。(Ⅲ301.12)

3.1.4.3 ④人や立場・呼び名について、～と申し上げる

ここでは、「人や立場・呼び名について、～と申し上げる」の用法について、事例を挙げておく。『蜻蛉日記』において、会話文に1例のみ見られる。

(50) 「殿の通はせたまひし源宰相兼忠とか 聞こえし人の御女の腹にこそ、女君いとうつくしげにて、ものしたまふなれ。(Ⅲ279.11)

3.1.5 ⑤その他行為「する」「願う」「会う」

最後に、発言行為以外の行為「する」「願う」「会う」という意味・用法についてみる。「する」の謙譲語が7例、「願う」の謙譲語が3例、「会う」の謙譲語が3例、合計13例、全110例のうちの11.8%である。

i 「する」の謙譲語とした事例は、「聞こゆ」の前に、「返り」「返りごと」「消息」「うめき」が来るものである。「返りごと」2例、「消息」1例、「御消息」2例、「御返り」1例、「うめき」1例の計7例見られる。ここでは、「聞こゆ」は「する」の謙譲語としたが、「申し上げる」という発言行為でないわけではない。しかしながら、「返り」「消息」「うめき」に発言行為が含まれているとみなし、「聞こゆ」は「する」の意味・用法とした。(56)は、速度が養女へ度重なる求婚をするので、それに困り果てた道綱母が、兼家に相談したら、その返事に、「時期については話してあるのに、どうしてこうあせるのだろうか。8月になるのを待っている間に、そちらでははなやかにもてなしておいでとか、世間で取沙汰しているようだ。そのほうがかえって、恨みのため息でもつきたい気持ちだよ」と、書いてあったという場面である。

(51) はたあやしともや思はずありけむ、返りごとなど 聞こえてけり、と伝へ聞きて、(Ⅱ182.12)

(52) 幼き人の「ひたやごもりならむ。消息聞こえに」とて、ものするにつけたり。(Ⅱ227.03)

(53) 日暮れて、「賀茂の泉におはしつれば、御返りも 聞こえで帰りぬ」と言ふ。(Ⅲ301.14.)

(54) 返りごと 聞こゆべきを、まづ、これはいかなることぞと、ものしてこそは、とてあるに、(Ⅲ325.14)

(55) 帰りに、「『などか、御消息聞こえさせたまふ間にて、御返りのなかるべき』といみじう恨みきこえたまひつる」など語るに、(Ⅲ326.14)

(56) びびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも 聞こえてむかし」などあり。(Ⅲ340.12)

ii 「願う」の謙譲語とした「聞こゆ」は以下の3例である。(57)は、(50)に後続する事例

で、道綱母が養女を迎えたいと周囲に話したところ、適当な娘がいるので、そのようにお願いしたらどうかと言う人がいた、という場面である。「養女を迎えたいと申し上げた」と、発言行為として分類することも可能である。(58)(59)は、巻末歌集の例である。どちらも地の文に用いられ、「歌を御所望になった」という意味である。

(57) 女君いとうつくしげにて、ものしたまふなれ。おなじうは、それをやはさやうにも
聞こえさせたまはぬ。(Ⅲ279.13)

(58) 尚侍の殿、「天の羽衣といふ題をよみて」と聞こえさせたまへりければ、
道綱母 ぬれ衣にあまの羽衣むすびけりかつは藻塩の火をし消たねば(Ⅳ366.10)

(59) 「この筈にうたむ」とて、摂政殿より、歌聞こえさせたまへりければ、
道綱母 千代も経よたちかへりつつ山城のこまにくらべしうりのすゑなり(Ⅳ375.12)

iii 「会う」の謙讓語とした「聞こゆ」は以下の3例である。この意味・用法でも、「申し上げる」という発言行為を含んでいる。(60)(61)は道綱母の鳴滝籠りの場面である。(60)は兼家の使いが道綱母に、「毎日はお訪ねできない」と述べ、(61)は、道綱が「今までご無沙汰しておりましたおわびを兼ねて」参上したと大夫に取り次がせる場面である。(62)は、道綱母が兼家へ返した文で、「お見舞いしなければと」誰よりも先に気づいていたという内容である。「人とふ」に対応しているため、「会う」に分類した。

(60) 夕影になりぬれば、「急ぐとあれば。え日々には聞こえず。おぼつかなくはあり。
(Ⅱ239.01)

(61) 兵衛佐なめりと思へば、大夫呼びいだして、「いままで聞こえさせざりつるかしまり、とり重ねてとてなむ、まゐり来たる」と言ひ入れて、(Ⅱ247.11)

(62) 「心細げなる山住みは、人とふものこそ聞きしか。さらぬはつらきものと言ふ人もあり」とある返りごとに、「聞こゆべきものとは、人よりさきに思ひよりながら、ものと知らせむとてなむ。(Ⅱ264.01)

3.2 『蜻蛉日記』における「申す」の意味・用法

「申す」は11例のみ見られる。発言行為とその他行為の二つに大きく分けられる。

発言行為④「言ふ」の謙讓語、「申し上げる」	—————	4例
その他行為 i 「願う」「祈る」の謙讓語、「お願いする」「お祈りする」	—————	7例

まず、発言行為である④「申し上げる」の意味・用法である4例について述べる。(63)(64)(65)(66)はいずれも会話文で使用されている。(63)(64)は夢解きをする人物、(65)は道綱、(66)は兼家の発話である。(63)(64)の聞き手は道綱母であり、夢解きをする人物の身分は低い。(65)は、右馬頭藤原遠度が道綱母の養女へ求婚している場面で、道綱が事の成り行きを道綱母へ説明する箇所である。「右馬頭さまも『殿(兼家)は何か仰せられまし

たか』とお尋ねになりましたので、『仰せがございました』と」遠度に申したと、道綱母に報告している。(66)は、兼家が道綱母に対して、下山の挨拶を「仏」へ「申しあげなさい」と言う意味である。

(63) (64)「これは大臣公卿出できたまふべき夢なり。かく 申せば、男君の大臣近くものしたまふを 申す とぞ思すらむ。さにはあらず、きんだち御行先のことなり」とぞ言ふ。(Ⅲ278.09)

(65) また、かの頭も、『殿は仰せられつることやありつる』となむのたまひつれば、『さりつ』となむ 申しつれば、『明後日ばかりよき日なるを、御文奉らむ』となむのたまひつる」と語る。(Ⅲ325.01)

(66) 「このこと、かくすれば、出でたまひぬべきにこそはあめれ。仏にこのよし 申したまへ。例の作法なる」とて、天下の猿楽言を言ひののしらるめれど、(Ⅱ251.07)

次に、その他の行為である i 「願う」「祈る」の謙讓語、「お願いする」「お祈りする」7例について述べる。これは、「神仏や朝廷など支配者に、お願い申し上げる・お祈りする」という意味・用法である。その他の行為としたが、発言行為でないわけではない。この意味・用法は、単なる発言行為ではなく、請願、祈願、陳情のような特定の意図を持つことが、④「申し上げる」とは異なる。(70)は冷泉院にお願いする、それ以外の(67)(68)(69)(71)(72)(73)は、すべて神仏にお祈りするという意味である。(70)は、兼家が道綱を元服させ、院(冷泉院)に叙爵をお願いすると取り決める場面である。(73)は手紙文に使用された事例で、石山寺で出会った法師に、「大夫を一人前にしてくださいようにとだけ、お祈りください」としたためる場面である。(67)(68)(69)(71)(72)はすべて地の文で、道綱母が仏に「お願い申し上げる・お祈りする」という意味で用いられる。

(67) 九月になりて、世の中をかきからむ、ものへ詣でせばや、かうものはかなき身の上も 申さむ、などさだめて、いと忍び、あるところにもものしたり。(Ⅰ149.08)

(68) 夜になりて、湯などもものして、御堂に上る。身のあるやうを仏に 申すにも、涙に咽ぶばかりにて、言ひもやられず。(Ⅱ206.09)

(69) さては夜になりぬ。御堂にてよろづ 申し、泣き明かして、あかつきがたにまどろみたるに、見ゆるやう、(Ⅱ208.13)

(70) それより後ぞ、すこししばしば見えたる。「この大嘗会に院の御給ばり 申さむ。幼き人にかうぶりせさせてむ。十九日」とさだめてす。(Ⅱ212.08)

(71) いまはまた降りくべからむものを、道にて雨もや降らむ、神もや鳴りまさらむと思ふに、いとゆゆしう悲しくて、仏に 申しつればにやあらむ、晴れて、ほどもなく帰ったり。(Ⅱ241.01)

(72) 御堂にものするほどに、ここちわりなし。おぼろげに思ふこと多かれど、かくわりなきにものおぼえずなりにたるべし、なにごとも 申さで、明けぬと言へど、雨なほおなじやうなり、(Ⅱ261.02)

(73) 「いまは、かぎりに思ひはてにたる身をば、仏もいかがしたまはむ。ただ、いまは、この大夫を人々しくてあらせたまへなどばかりを申したまへ」と書くにぞ、(Ⅲ301.02)

3.3 『とはずがたり』との比較

これまで、分類してきた事例数を表にまとめる。会話文、手紙文、心内発話は「会話文」として一つにまとめ、地の文、和歌と分けて示すが、これといった特筆すべき特徴は見られなかった。『とはずがたり』においては、「聞こゆ」「申す」ともに、会話文での使用例が少ないが、地の文と会話文の比率を算出していないので、単純な比較はできない。

〈表1〉本動詞「聞こゆ」の意味・用法

	『蜻蛉日記』				『とはずがたり』			
	地の文	会話文	和歌	計	地の文	会話文	和歌	計
①聞こえる	7		1	8	21			21
②思われる	8	1	1	10	6	2		8
③伝聞する	2	1		3	18	2		20^D
④言う④申上げる	6	61	1	68	3			3
㊦歌を詠む	6	1		7				0
㊧～と呼ぶ		1		1	2			2
⑤ i する		7		7				0
ii 願う	2	1		3	1			1
iii 会う		3		3				0
合計	31	76	3	110	51	4		55

〈表2〉本動詞「申す」の意味・用法

	『蜻蛉日記』				『とはずがたり』			
	地の文	会話文	和歌	計	地の文	会話文	和歌	計
①具体的用法								
④ 申上げる		4		4	187	53		240
i 願う	4	3		7	17	2		19
ii する					19	5		24
iii 勸酒					4	1		5
②形式的用法					44	17		61
③連語					2	3		5
	4	7		11	273	81		354

『蜻蛉日記』、『とはずがたり』の延べ語数は、それぞれ、22,400語、31,335語である^②。「聞こゆ」は『蜻蛉日記』で110例、『とはずがたり』で55例見られる。『蜻蛉日記』は、延べ語数が『とはずがたり』よりも少ないのにも関わらず、「聞こゆ」の事例数が、『とはずがたり』に比べて、2対1の比で多いことがわかる。『蜻蛉日記』において、「聞こゆ」の最も多い意味・用法は、④「言ふ」の謙讓語④「申し上げる」で、68例、そのうち61例が会話文での使用である。一方、『とはずがたり』においては、最も多い意味・用法は、①「聞こえる」で、21例見られる。すべて地の文において用いられている。

穂田(1965)で「敬語『聞ゆ』『聞えさす』は、中世に及んでその地位を『申す』に譲ったと言われる。」と述べている。鎌倉時代成立の『とはずがたり』において、「聞こゆ」は、敬語としてはほとんど用いられず、「聞こえる」「伝聞する」の意味・用法が主である。

『蜻蛉日記』において、「申す」は11例のみの使用で、そのうち、発言行為である「申し上げる」の意味・用法は4例、夢解きをする人物、道綱、兼家の発話において、使用されている。和田(1956)で指摘されている『源氏物語』における「申す」の「語感」についての指摘と同じ結果になるかと思われる。

源氏物語の「申す」は、身分の遥かに低い者を話手、為手として用いられることが多く、一般に公的で格式ばつてゐて、もし、身分の高い者を話手、為手として用いると、空虚な、よそよそしさを感じさせた。而して、時には、為手、受手の関係を無視した開手優遇も表はし得た。

発言行為以外の行為については、『蜻蛉日記』において、「聞こゆ」は13例見られるが、いずれも、発言行為を含んだ上で、「する」「願う」「会う」という行為につながる意味・用法である^③。発言行為以外の行為を表わす「申す」は7例見られ、そのうち6例が「仏」へ、1例が「冷泉院」へお願いするという意味・用法である。お願いする対象がかなり限定されている。穂田(1962)で、「対『神仏』関係に『申す』専用度が高い」と述べられているが、『蜻蛉日記』においても同様である。『とはずがたり』においては、「申す」のその他行為の意味・用法は広い^④。『蜻蛉日記』における「申す」の用例が少ないので、考察は省く。

3.4 複合動詞

複合動詞について、事例数についてのみ簡潔に述べる。『蜻蛉日記』『とはずがたり』において、「聞こゆ」「申す」を前項、あるいは後項に持つ複合動詞の事例数を〈表3〉に挙げる。複合動詞の認定は、『蜻蛉日記』は、宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(2014)、『とはずがたり』は、辻村敏樹編(1992)による^⑤。

「聞こゆ」の複合動詞は、異なり語数8、延べ語数10であり、『とはずがたり』より多く見られる。『とはずがたり』においては、「聞こえさす」を「聞こゆ」に分類すると、「聞こえなす」の1語しかない。

「申す」の複合動詞は、『蜻蛉日記』において、異なり語数6、延べ語数7である。『とはずがたり』においては、異なり語数21、延べ語数38である。

〈表3〉複合動詞一覧

	聞こゆ	申す
『蜻』	聞こえ合はず1, 聞こえ置く2, 聞こえごつ2, うち聞こえごつ1, 聞こえ立つ1, 聞こえ定む1, 聞こえのたまふ1, 取り聞こゆ1	申し付く1, 申し継ぐ1, 申し尽くす1, 伝へ申す1, 執り申す2, 罵り申す1,
『問』	聞こえさす1, 聞こえなす1	申し置く8, 申し入る5, 申し遣る3 申し合はず2, 申し出づ2, 申し承る2, 申し伝ふ2, 申し合ふ1, 申し表す1, 申し出だす1, 申し受く1, 申し叶ふ1, 申し通はず1, 申し通ふ1, 申しことづく1, 申し定む1, 申し知らず1, 申し尽くす1, 申し続く1, 申しなす1, 申し紛らかす1

4. おわりに

本稿では、『蜻蛉日記』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法を記述、分類し、その事例数を示した。また、『とはずがたり』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法の事例数と比較した。

『蜻蛉日記』における「聞こゆ」の最も多い意味・用法は、④「言ふ」の謙譲語④「申し上げる」の68例で、全体の61.8%を占める。この「申し上げる」の意味・用法は、『とはずがたり』においては、ほとんど見られなくなり、「聞こゆ」ではなく、「申す」が用いられている。

『蜻蛉日記』における「聞こゆ」には、発言行為以外の行為「する」を示し得る、「消息聞こゆ」のような意味・用法が見られながら、『とはずがたり』においては、「聞こゆ」には、発言行為以外の行為は、ほとんど使用されていない。

『蜻蛉日記』において、「申す」が発言以外の行為を表わす場合、特に、「仏」に対して、「願う」「祈る」の意味・用法が主であったのが、『とはずがたり』においては、「願う」以外にも、「する」「勸酒」を表わすなど、その意味・用法は広がりを見せる。

最後に、「聞こゆ」の意味・用法中、『蜻蛉日記』『とはずがたり』において、ともに見られる「思われる」「伝聞する」の意味・用法についても、「思ふ」「言ふ」「聞く」などの語との関連から、詳しく見る必要がある。今後の課題である。

注

- ① 入江(2015)では、「聞こゆ」が「世に聞こゆ」として現れた場合は、⑤連語としたが、意味・用法としては、③「間接的に他人から聞く。伝聞する。うわさで聞く」に分類できるので、本稿では、③に分類した。
- ② 『蜻蛉日記』の延べ語数は、宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(2014)による『とはずがたり』の延べ語数は、辻村(1992)を基に編集した高梨(2002)『とはずがたり語彙表』『使用度数順語彙表』から算出。
- ③ 分類に際して、穂田(1964)を参考とした。
- ④ 入江(2014)参照。
- ⑤ 複合動詞の認定で異なる語について挙げる。『とはずがたり』において、「申し承る」「申し知らせ」は1語とする。

【参考文献】

- 穂田定樹(1962)『「申す」と『聞ゆ』—源氏物語・枕草子を資料として—』『国語国文』31(11)
- 穂田定樹(1964)『「申す」と『聞ゆ』補遺—形態の側から—』『語学文学会紀要』(2)北海道学芸大学語学文学会
- 穂田定樹(1965)「続『申す』と『聞ゆ』—源氏物語以後—」『国語国文』34(9)
- 入江さやか(2013)『「とはずがたり」における「言ふ」の意味・用法』『同志社国文学』第78号
- 入江さやか(2014)『「とはずがたり」における「申す」の意味・用法』『同志社国文学』第81号
- 入江さやか(2015)『「とはずがたり」における「聞こゆ」の意味・用法—「言ふ」「聞こゆ」「申す」「奏す」—』『同志社日本語研究』第18号
- 木村正中・伊牟田経久校注・訳(1995)『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』小学館
- 久保田淳校注・訳(1999)『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』小学館
- 高梨信博(2002)『とはずがたり語彙表』早稲田大学文学部高梨信博研究室
- 辻村敏樹編(1992)『とはずがたり総索引』【自立語篇】笠間索引叢刊99 笠間書院
- 宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(2014)『日本古典対照分類語彙表』笠間書院
- 和田利政(1956)「源氏物語の『申す』」『國學院雑誌』57(7)

〔付記〕本稿は、科学研究費補助金による2010～12年度基盤研究(C)「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者 石井久雄, 研究課題番号 JSPS 22520478), 及び, 2013～2015年度基盤研究(C)「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者石井久雄, 研究課題番号 JSPS 25370531)の成果の一部である。